

毎日歌壇

加藤 治郎 選

壊れてる(音)雨戸をたたく(あめ)愛さな
かった(わけ)を受話器に 平塚市 芝澤 樹
△評▽叙情が断片化している。壊れかけて
いる。記号と読点はむしろ言葉をつなぎ止
めているのだ。激しく心を打つ作品である。

あとがきに残すことなど何も無い 清しい冬
の道を歩めり 所沢市 神田 望

△評▽全て本文で表現できた。何も付け加
えることはない。満ち足りた心を感じる。

天高く笑い飛ばせと言ってるね 涙ふく日の
雲は友達 磐田市 白井 善夫

祝祭の余韻が残る街を背にコロケそばをか
き込む夜明け 大津市 世田 夏雪

ああキミのスマホも同じ声で泣くミュウミュ
ウ親呼ぶ捨て猫の声 静岡市 海瀬安紀子

出口2から角が来るたび阿弥陀くじみたいに
5回曲がれば我が家 京都市 小川 ゆか

木犀を好きだと君が言ったから焼き戻さされ
るほどに苦しむ 堺市 初夏みどり

イヤフォンの有刺鉄線張りながらヘッド・ポ
ウイを地下鉄で聴く ふじみ野市 雨雨雨汰

バンクロックに思い入れがなくなつて車が雨
を轆くのをみてる 花巻市 永汐 れい

午睡から飛び起きるたび逆上がり初めてでき
たときの顔して 宇都宮市 霧島あきら

水原 紫苑 選

どの雨も黒くはなくてあなたたちの手は汚れ
ないようになって 京都市 小池ひろみ
△評▽本当の黒い雨は誰にも黒くは見えな
いのかもしれず、それを降らせた誰の手も
汚れないのかもしれない。

客がみな夜空の果てに散りしあなたは来
るのトーベ・ヤンソン 碧南市 江原 冬莉

△評▽ムーミンの作者ヤンソンの自由な精
神は今も新しく、夜の訪問者にふさわしい。

静けさは予知夢のように肌を刺す対岸のきみ
がとける音 札幌市 鈴木 精良

「明日じゃない、来るのは今の続きだよ」教え
てくれた冬の図書館 所沢市 里見 脩一

始め方わかつても終はれない「アマゾン」
を聞く摩訶あゝの山 東京 池崎富夫

老犬の瞳だけが持つ尊さをムーンストーンに
諭せる獣医 千葉市 芍 葉

冬枯れのさくらはそらに根をはりて闇にいか
なる花さかせらむ 春日部市 宮代 康志

天然がスイッチ押せば鳥たちははしづきのよう
に空へ広がる 静岡市 海瀬安紀子

レンブラント光線の名を習うまであれは「き
ぼうのひかり」だったね 福津市 原田 冬

出逢うとは未知の器官に気づくことフォッサ
マグナに緋の花咲かず 宮津市 野 ばら

伊藤 一彦 選

「閉まります、お詰めください」乗客が皆で
作った優しい空間 横浜市 友常 甘酢
△評▽上の句はラッシュ時の駅のアナウン
ス。「優しい空間」の語がいい。後から乗っ
てくる人のための乗客の思いやりと協力。

なつかしい列車に乗ってわたる橋わたしがわ
たしを通過してゆく 東京 奥山いずみ

△評▽かつての自分を思い出している自分
を鮮やかに歌った。「わ」音の韻もみごと。

煤払い煤け大黒あてがはれ御利益あれと先づ
小槌拭く 霧島市 内村としお

考えて部下には書くが上司への賀状の言葉は
例文による 静岡市 柴田 和彦

予定表一行ずれて書いてある母は未来を過去
にもできる 市川市 岡本 恵

今ライン送信したらガンバレと返信来るのが
怖くて送れず 行田市 遠藤 礼子

かなしみがからっぽの胸ノックする誰か相手
をしてやってくれ 春日井市 月夜の雨

肉じゃがをカレーにアレンジするようにオオ
タニサンを詠す一平 札幌市 住吉和歌子

大谷のあの契約の凄さから彼の戦争の無謀さ
を知る 川西市 那須三千雄

音感があるならきくと雨音はソラとはじまり
シミと消えゆく 東京 石川 真琴

米川千嘉子 選

大谷の金と安倍派の裏金と並ぶ一面大きな活
字 仙台市 梅津シゲル
△評▽美感のない程の大金にして、あくま
でも痛快な大谷選手の契約金。腐臭漂う安
倍派の裏金問題。並んでコントのよう。

指先と顔の動きの会話あり声だけに棲む言葉
ならず 城陽市 近藤 好廣

△評▽言葉には魂が宿るといふが、手話と
いう真剣な無声の言葉にも言葉が宿る。

絹製のパジャマとマスクに護られてミイラの
ように眠る冬の夜 碧南市 江原 冬莉

金になるものは消えない戦争も麻薬も風俗も
宗教も 松原市 たりりずむ

コメディアンに戻る日ありやゼレンスキー戦闘
シャツを舞台衣装に替へ 横浜市 大建雄志郎

成長を「ママ」の呼び方にも見せて八歳男子
照れつつ「かあちゃん」 高崎市 樋浦マサエ

コッヘルへ一人前のおでん入れお一人様の冬
の夕暮れ 日南市 宮田 隆雄

黄色の美たわわにつけて柵は細き枝をシナ
プスのように放射す 赤警市 田中百合子

あと2キロアクセスを踏み故郷へきつとあな
たはあの場所にいる 所沢市 里見 脩一

予防接種受くと捲りし腕に触る指の冷た
し医師もナースも 日立市 木村 恵子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳句」、○○先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます